

京都大学 大学文書館だより

Kyoto University Archives Newsletter

第36号

目次

アデレード大学文書館訪問記： 適正な記録管理に関する大学文書館	
大木 悠佑	2
『羽田亨日記』の刊行	
西山 伸	4
日誌	6

大学文書館の動き：	
西田幾多郎記念哲学館と共催で展示を 行いました	7
『京都帝国大学史』の編集	
久保田 裕次	8



京都帝国大学勤労報国隊解散記念（1944年9月14日）

1941年9月1日、学生生徒を隊員とする京都帝国大学報国隊が発足した。戦時動員体制が強化された1943年以降、報国隊の勤労作業への出動が本格化した。写真は東京第二陸軍兵廠宇治製造所で火薬貯蔵庫のための消火用貯水池の掘削作業に従事した報国隊の離隊式である。『羽田亨日記』（関連記事4頁～5頁）の記述によると、京大生の作業は「予想以上ノ成功を得たり」と陸軍から評価された。

アデレード大学文書館訪問記：適正な記録管理に 関与する大学文書館

学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻
博士後期課程

大木 悠佑

はじめに

記録 / アーカイブズ管理の世界では、オーストラリアは先進的な地域の一つとして名前が挙げられる。記録管理の国際標準 ISO15489-2001 は、1996 年に策定されたオーストラリアの国内標準 AS 4390 の影響を受けていることも有名な話である。こうした記録 / アーカイブズ管理の取組みは当文書館だよりでも 2 度紹介されている（第 16 号・21 号）。

筆者は 2015 年よりオーストラリアの各州のアーカイブズ機関を訪問し、アーカイブズ機関が記録管理に関わる仕組みや役割を調査しており、2018 年 9 月には、南オーストラリア州のアデレード大学文書館を訪問した。本稿では、担当者から説明を受けた大学の記録管理と大学文書館の関わりに関する仕組みを中心に紹介したい。



大学文書館が入るパール・スミス図書館

アデレード大学と大学文書館

アデレード大学は、南オーストラリア州の公立大学であり、中心的なキャンパスであるノーステラス・キャンパスは、州都アデレードの中心市街地北側、州の博物館や図書館が

建ち並ぶ文化的なエリアに位置している。大学文書館は、このキャンパス内のパール・スミス図書館の中にある。

大学文書館は、アデレード大学創設（1874 年）期からの大学運営に関わる記録を収集保存して利用に供しているほか、オーストラリアのアーカイブズ機関の特徴でもある、非現用段階となった文書だけでなく、記録の発生、管理を含めた組織の記録管理全体に関わる業務を担っている。

記録管理システムとその運用

今回の訪問では、ヒューレット・パカード・エンタープライズ・コンテンツ・マネージャー（Hewlett Packard Enterprise Contents Manager, HPE CM）と、コレクション・マネジメント・システム（CMS）の 2 つのシステムについて、実際に作動している画面を見ながら説明を受けた。簡潔に説明すると、HPE CM は、大学業務で発生する現用段階の文書を登録して管理するシステムであり、CMS はアーカイブズ資料を管理するシステムである。HPE CM で作成された文書でアーカイブズ資料として永久的に保存するものは、業務上必要となる期間が終われば、CMS へと移される仕組みとなっている。

説明では電子メールを事例として登録の仕組みを拝見した。電子メールを 1 件のメール単位で HPE CM に登録するが、その際に、記録の保存期間やその後の処置（アーカイブズとして保存または廃棄）の基準となる、記録処分基準（Records Disposal Schedules）の該当する項目を選択しなければならない。例えば、奨学金に関する文書であれば、州アーカイブズが定めた「一般処分基準 24: 大学」

の「10.12 奨学金」の1～5いずれかを選択することになる（表参照）。こうした登録は、それぞれの職務を担当する職員が行っている。記録処分基準の項目に関する情報は、システム内に登録されているので、登録者はプルダウンで選択することができ、管理や利用に必要な情報は自動的に付与される仕組みとなっている。

また、大学の各部門は大学文書館に申請し、文書館長による承認を受けなければ、新規にフォルダを作成することはできない。

記録管理の研修

ここまでの説明を聞いて、筆者には大きく2つ疑問が浮かんだ。1つめは「HPE CMには登録する作業が必要となるが、職員がこれは業務に関係ないから登録しないと（恣意的に）判断することはないのか」である。この質問に対しては、業務に関係して発生した文書はすべて登録することになっている、との回答であった。

2つめは、記録処分基準の該当する項目の選択に関することで、アデレード大学で発生する文書は、州アーカイブズが策定する2つの一般処分基準から選択することになるが、合わせて約300頁、項目数もかなり多くなるため、「理解していない職員であれば、適切でない記録処分基準の項目を選ぶのではないのか」といったことである。この質問に対しては、確かにそうした懸念はあり、先の質問とも関連するが、記録管理やその重要性を理解し、それを実践してもらうことが大事であり、研修を通じて理解してもらうようにしている、また、必要に応じて、専門的な助言や補助をしている、といった回答であった。

アデレード大学で新たに勤務することになった職員は、1週間の研修プログラムを受講しなければならない。その内容は、健康管理、アボリジニ文化に対する理解、サイバーセキュリティ、そして記録管理（レコードキーピング）である。担当者は、記録管理の部分は

少ししかないけど、と話していたが、大学業務に携わる上で記録管理が重要な要素だと認識されている表れだと感じた。

おわりに

ここまで大学の記録管理の仕組みを中心に紹介してきた。この他に書庫を見学した後、全体の質疑応答では、未整理のバックログがあつてとか、リソース（人・資金）が足りなくてとか、デジタル対応を進めないと、といったアーカイブズ機関が抱える課題の話題で盛り上がった。

制度的な面は言うまでもなく、確かに記録の保存期間やその後の処置（アーカイブズとして保存または廃棄）の基準となる、記録処分基準は詳細で内容も多岐にわたり、それをコントロールする運用面も、仕組みとして整えられている。

しかし、大学文書館が抱える課題には、日本の現状にも通じるところが数多くある。その中でアデレード大学文書館は、研修や助言を通じて、大学全体の業務の証拠となる記録の管理に関わり、その業務を支援する責任を果たそうと取り組んでいる、そうした姿を見ることができた有意義な訪問であった。

表 一般処分基準の例（10.12 奨学金）

	業務活動／プロセス	内容	処分行為
10.12.1	奨学金	学生奨学金の登録簿	文書館で保存
10.12.2	奨学金	学生を対象とした内部奨学金の設立、方針及び条件に関する記録	文書館で保存
10.12.3	奨学金	学生を対象とした外部奨学金の設立、方針及び条件に関する記録	業務完了後10年後に廃棄
10.12.4	奨学金	奨学金を受給した学生の申請書の管理	業務完了後7年後に廃棄
10.12.5	奨学金	奨学金を受給しなかった学生の申請書の管理	最後の業務から1年後に廃棄

『羽田亨日記』の刊行

京都大学大学文書館教授 西山 伸

京都大学大学文書館では、このたび京都大学大学文書館資料叢書の第1巻として『羽田亨日記』を刊行した。本稿では、その概要を紹介したい。

羽田亨（1882～1955）は京都府中郡五箇村（現京丹後市）の出身、西域史の研究者として知られ、1913年京都帝国大学文科大学助教授、1924年には文学部教授に就任した。その後、文学部長、附属図書館長を歴任、1938年には、現職のまま死去した親友の浜田耕作の後を襲って京都帝国大学総長に就任し、敗戦後の1945年11月まで務めている。また、総長在任の末期には東方文化研究所（人文科学研究所の前身の一つ）の所長にも就任している。

今回翻刻した『羽田亨日記』（以下、「本日記」と表記）は、1938年1月から1945年12月までである（ただし、1941年の分は現存していない）。なお、本日記は羽田の令孫藤田昌子氏のご寄贈になるものである。

本日記の記載は詳細である。1940年までは記載のない日もあるが、1942年以後は毎日のように書かれている。例外は1945年7月27日から8月25日の間で、「極暑ト深憂ト更ニ八月六日頃ヨリ一週間程ニ亘リテ足部出疹ノ祟リトノ為」書けなかったと自ら記している[1945年8月25日条]。

その内容も豊富であり、家族をはじめとするプライベートについても書かれているが、それだけではなく羽田の広い交友関係も本日記から窺うことができる。特によく知られているのが、カルピス株式会社創業者の三島海

雲との親しい関係であり、羽田が東京に行った折りに会食したり三島家に宿泊したりするなど、三島は本日記に頻出する。他にも、武田薬品工業の武田長兵衛（五代目、六代目）、洋画家の太田喜二郎などの名もよく登場する。もちろん、東洋史関係の研究者仲間との交流も記されている。

しかし、本日記で最も記載量が多いのは京大における公務に関することである。以下いくつかの例を取り上げる。

滝川事件や沢柳事件ほど世間的には知られていないが、羽田の在任中に経済学部の石川興二教授の休職事件が起こっている。1943年の1月から2月にかけて、石川が以前出した『新体制の指導原理』という著作の中に治安維持法を批判した箇所があると枢密院や議会で問題とされた。本日記によると、上京した羽田に対し橋田邦彦文相は「本省ノ所置ヲ待タズシテ本人ヨリ自発的ニ休職ニナルヤウ願出ルヤウニ総長ニ於テ計フコトヲ希望スル旨」述べたという[1943年2月16日条]。大学に戻った羽田は、石川に「従来ノ経過ヲ詳細ニ告ゲ自発的ニ静養ヲ願出ルコトガ此際最モ適当ナルベキヲ説」き[1943年2月18日条]、石川も承諾し、経済学部教授会の承認を経て3月18日付で休職となった。

しかし、この件はこれで終わりではない。翌1944年3月、文部省に岡部長景文相を訪ねた羽田は「石川教授を復職して人文科学勤務に致したき希望をも述べ」たところ、文相は「然るべし」と答えていた[1944年3月29日条]。実は石川休職の際、休職明け後は人文科学研究所に復帰させることを文部当局

との間で話し合っていたようである。羽田は、この「復職問題ヲ処理シ余ノ責任ヲ全フスルコトガ面倒デモ何デモ余ノ職責ト考」へていたと記している[1945年1月12日条]ように、石川の問題に総長としての責任を強く感じて、復職に尽力していた。文部省および学内の調整が済み、無事石川の復職が実現するのは1945年2月のことであった。

本日記からは、京大と陸軍との組織的な関係はほとんど窺うことができないが、海軍との関係は散見される。対英米開戦からまもなく、京大の各学部では南方を対象とする研究会が相次いで組織され、やがてこれらを束ねて附置研究所を設置する計画が立てられるようになるが、こうした動向と海軍は関わっていたようである。1943年11月、上京した羽田は「海軍省ヲ訪ヒ軍務局第二課長矢牧大佐ト会談木材工学研究所設置及ビ南方研究所設置ニツキ後援ヲ依頼快諾ヲ得」と記している[1943.年11月22日条]。1944年5月に設置された木材研究所と合わせて南方研究所設置について、海軍が支援したことが分かる。ただ、京大が構想した南方科学研究所設置が盛り込まれた1944年度予算案は閣議決定されているが、実際には設置されないまま敗戦を迎えている。

この他に、1943年10月には海軍技術研究所の分所を京大に置き、総長を分所長としたいと依頼が海軍側からあり、羽田は「研究ハ本学研究体制ノ中ニ取入レ進捗ヲ計ルニ異議ナキ旨ヲ答」えている[1943年10月25日条]。

1943年10月、学生生徒の徴集猶予が停止された。いわゆる「学徒出陣」である。この徴集猶予停止を含む「国内態勢強化方策」は、9月22日に東条英機首相によってラジオで国民に知らされた。それを聞いた羽田は「今夕東条首相国内態勢強化ニツキテ放送学生ノ

徴兵猶予停止、理工科系学生ノ入営延期制等新聞記者ノ今日午後伝ヘ来リシ件々モ概括的ニ演述セリ」と記している[1943年9月22日条]。羽田は、この5日後の27日に東大の内田祥三総長を訪ねて、「午后東大を訪ひ内田総長ト会談新態勢ニツキテハ尚ホ何事モ分リ居ラズ」と記している[1943年9月27日条]ところを見ると、「学徒出陣」は大学側にとって事前の打診はなく、全くの不意打ちだったのではないと思われる。

11月20日には京大で出陣学徒壮行会が举行されている。この日の記載は次のとおりである。「本学出陣学徒壮行会ヲ運動場ニテ举行千七百名許リノ出席、緊張ト感激裡ニ終了、引続キ出デユク学生ハ構内ノ正門ニ出デ行クヲ残留学生ト教職員ガ正門マデノ沿道ニ見送り、更ニ平安神宮ニテ祈願祭ヲ執行三千ノ学徒戦場ニ功ヲ立テ、帰リ来ルモノ幾人ゾ、壮キ眦ノ裂クルマデ緊張セルヲ見ルカラニ有リ難キ涙ノ湧キ出ヅルヲ止ムル由モ無シ」[1943年11月20日条]。この「学徒出陣」により、甲南高等学校に在学していた羽田の三男も入隊している。羽田にとって、公私ともに感慨無量であつたろう。

戦時期の帝国大学総長に関する資料としては、他に東大の内田祥三関係資料（東京大学文書館所蔵）、東北大の真島利行の日記（東北大学史料館所蔵）なども公開されている。本日記と、こうした資料を照らし合わせていくことで、戦時下の大学に関する研究の深化が期待される。

[日誌] (2018年10月～2019年3月)

2018 年		12/ 3	学内より、総合博物館に関する資料閲覧のため来館。
10/ 2	Nobel Media より、本庶佑 本学特別教授の写真に関する照会。	12/ 3	近畿大学より、原勝郎の履歴に関する照会。
10/ 4	京都大学大学文書館利用等要項を改正。	12/ 4	西山、関西テレビ「ちゃちゃ入れマンデー」に出演、「回生」の由来につき説明。
10/ 4	大阪新美術館建設準備室より文書館業務・施設視察のため来館。	12/10	朝日新聞より、学徒出陣の背景に関する取材のため来館。
10/ 9	林康紀氏より、医学研究科・森島・藤原先生関係資料を寄贈。	12/11	大学文書館運営協議会。
10/ 9	国立民族学博物館より、1960年代の学生運動の写真に関する照会。	12/13	南丹市立文化博物館より、芦生演習林に関する資料調査のため照会。
10/18	瀬戸真奈氏より、京都大学馬術部アルバム等を寄贈。	12/18	有賀誠一氏より、有賀鐵太郎関係資料を寄贈。
10/21	西山教授、「京都大学の西田幾多郎」講演会（於京都大学）において「西田幾多郎在職時の京都帝国大学」と題して講演。	12/18	群馬テレビより、荒木寅三郎の写真使用に関する照会。
10/25	大学文書館教員会議。	12/20	元（ウォン）助教、「国立近現代建築資料館における情報システム導入のための検討業務」有識者会議（於学習院大学）に出席。
10/30	広島県廿日市市より、写真使用に関する照会。	12/25	清水勇氏より、69年紛争時理学部ピラ等を寄贈。
10/31	『京都大学大学文書館だより』第 35 号刊行。	2019 年	
11/ 2	東京大学より、当館の業務調査や館内見学のため来館。	1/ 4	東京都江東区政資料室より、当館視察見学のため来館。
11/ 3	西山、2018 年度読史会大会（於京都大学）において「『羽田亨日記』と戦時下の京都帝国大学」と題して報告。	1/10	読売新聞より、李登輝氏の在学期間に関する照会。
11/ 6	企画展「京都帝国大学と学生スポーツ」開催（～2019 年 2 月 17 日）。	1/10	大学文書館教員会議。
11/12	東北大学より、当館設立に関する調査のため来館。	1/12	西山、国立近現代建築資料館展示「明治期における官立高等教育施設の群像」ギャラリートーク（於国立近現代建築資料館）において「京都大学大学文書館と建築関係資料」と題して講演。
11/15	関西テレビより、「回生」という言葉に関する照会。	1/24	西山、「近畿大学の大学アーカイブズと校史関係資料の収集・整理に関する調査・研究」学内研究会（於近畿大学）において「大学沿革史編纂の現状と意義」と題して講演。
11/19	法人文書管理等に関する研修会開催。	1/30	東京外国語大学文書館より、大学文書館業務研修のため来館（～2 月 1 日）。
11/26	京都大学国文学会展示のため、瀬原退蔵関係資料を貸出。	2/18	附属図書館主催展示「韓国古資料の世界」に企画展示室貸出（～3 月 3 日）。
11/29	大学文書館教員会議。	2/20	大学文書館教員会議。
12/ 1	西山、慶應義塾福沢研究センター主催「慶應義塾と戦争」シンポジウム・研究報告（於慶應義塾大学）にコメンテーターとして登壇（～12/2）。		

2/20 学習院大学等より、当館視察見学のため来館。
 2/21 東京芸術大学大学史料室より、資料閲覧・館内見学のため来館。
 2/22 中村佳正氏より、京都大学端艇部百年史(上巻)編集関係資料・『濃青』を寄贈。
 2/22 中山篤一郎氏より、京都帝国大学運動会陸上運動大会メダルを寄贈。
 3/ 1 東京農工大学より、歴史展示室見学のため来館。
 3/ 4 松井三郎氏より、京大合唱団同窓会資料を寄贈。
 3/ 4 学内より、吉田寮の階段手すりに関する照会。
 3/ 4 岐阜県大垣市教育委員会より、那波光雄に関する資料調査のため照会。

3/ 8 大学文書館運営協議会。
 3/11 西山、東京外国語大学文書館研究会において「大学史編纂の現状と課題 ー特に『京都大学百二十五年史』の編纂についてー」と題して報告。
 3/15 元(ウォン)、デジタルアーカイブ学会第3回研究大会・チュートリアル「Omeka」の講師として出席。
 3/19 大学文書館教員会議。
 3/20 『京都大学大学文書館研究紀要』第17号刊行。
 3/29 『京都大学大学文書館資料叢書1 羽田亨日記』刊行。

大学文書館の動き

西田幾多郎記念哲学館と共催で展示を行いました

大学文書館は、石川県西田幾多郎記念哲学館と共催で展示「京都大学の西田幾多郎」を、2018年9月4日から11月4日まで開催しました（於京都大学百周年時計台記念館歴史展示室）。1910年、文科大学助教授に就任した西田幾多郎は、その翌年に有名な『善の研究』を著し、その後も次々と論文を発表し、その思想は「西田哲学」と言われるようになります。その一方で京都における西田は、私生活では家族の病臥や死が相次ぐ苦難の時期を過ごしました。今回の展示では、そうした私的な側面を含めた京都時代の西田について、西田幾多郎記念哲学館、京都大学吉田南総合図書館、京都大学文学研究科図書館および当館の資料を用いて、さまざまな角度から展示を構成しました。その中には、西田の直筆原稿、着物、三高在学中に亡くなった長男謙を偲ぶ言葉を見返しに記した『フィヒテ全集』なども含まれています。また、西田が居住し、2016年まで残っていた田中上柳町の借家の写真、平面図も展示しました。

期間中の10月21日には、市川秀和福井工業大学教授、林晋京都大学大学院教授、当館の西山教授による講演会も開催しました。

人の動き（2018年10月～2019年3月）

2019年3月31日 久保田裕次、大学文書館助教を退任。

『京都帝国大学史』の編集

国士舘大学文学部専任講師 久保田 裕次

大学沿革史の成否は、編集方針・体制に大きく左右される。京都大学で初めて編集された大学沿革史は『京都帝国大学史』である。刊行された1943（昭和18）年という時節柄、京都帝国大学がいかに国策に協力してきたのかということが積極的に述べられるなど注目すべき点も多いのだが、小稿では、『京都帝国大学史』がどのような方針・体制のもとで編集されたのかということを、京都大学大学文書館所蔵「学史編纂一件書類」（識別番号01A20984）という資料から簡単に見てみたい。

『京都帝国大学史』は、序で当時の総長羽田亨が書いている通り、紀元2600年の記念事業の一環として計画された。40年9月の評議会で大学沿革史の編集が決定され、「一般の沿革」だけではなく、「本学に於ける学術発達の有様」を明らかにすることが方針として定められた（『京都帝国大学史』2頁）。そのため、総頁数1265頁のうち総記は82頁にもかかわらず、部局史の記述が9割以上を占めるという非常に特徴的な構成となっている。さらに、各部局に振り分けられた分担は、部局に属する講座ごとに執筆されることになっていた。

「学史編纂一件書類」には、「京都帝国大学史編纂手続」、「京都帝国大学史編纂要項」が収録されており、具体的にどのような編集方針がとられていたのかがよく分かる。編纂要項によれば、総記は、さきに挙げた「学術発達の記述を主」とすることに加え、「学生ノ理解シ得ル程度」の内容にすることとされている。また、各部局の記述の分量については、講座数や創立年数が考慮され、「各部配当原稿頁数」という書類によると、法学部に422頁、医学部に446頁、工学部に566頁、文学部に474頁、理学部に496頁、経済学部

172頁、農学部には364頁が割り当てられた。しかし、実際にこれら部局から提出された原稿の頁数は当初の割り当てを超過していたという。

さらに、「学史編纂ニ関スル打合会」（41年2月6日）のメモは沿革史編集をめぐる学内状況をリアルに伝える。この打合会では、各部局の進捗状況の報告が行われている。例えば、法学部は、「講座ノグループ及び学部沿革夫々担当者ヲ定メ、要領ヲ書上タル上之ヲ教授会ニ諮リ歩調ヲ合セテ執筆ノ予定ナリ」と比較的具体的な方針を述べていた。しかし、こうした部局ばかりであるはずもなく、医学部は、「未ダ進行セズ、斯カル事業ニ本学部教授ハ拙ナル故適当ナル見本ナキヤ（依ツテ庶務課長ヨリ小川学部長ニ取敢ヘズ文学部三十年史ヲ渡ス）」という状況であった。また、理学部は、「一月二十七日教授会ニテ促進セリ。今月十七日教授会ニテ更ニ促進スベシ。兎ニ角三月三十一日ニ第一回ノ原稿ヲ集ムベシ」と、教授会が開かれるごとに原稿の督促を行い、原稿を揃えようとしていた状況がうかがえる。ここに紹介したのは、ごく一部の発言であり、編集の進捗状況は部局ごとにまちまちであった。

こうした状況ではあったものの、42年5月頃からぼつぼつと原稿が集まり始めた。ただ、原稿は部局ごとに一括して提出されていたのではなく、完成した原稿から五月雨式に大学本部に提出され、編纂委員の主任であった原随園文学部教授に送付された。

小稿では一部を紹介するにとどまったが、「学史編纂一件書類」は、大学沿革史の編集の実状を生々しく伝えるものである。